国際研究論叢　25（2）：101～121，2012

教室のドラマトゥルギー：ゴッフマンの思想について

高　松　みどり*

Dramaturgy in the Classroom –Goffman's concepts for ritual research–

Midori Takamatsu*

Abstract

This paper explains why the theme of a *rite of passage* in two elementary schools in Japan and Germany was investigated from Goffman's viewpoint, shows that rituals are necessary for human public life and socialization, and justifies the attention paid to the aspect of performance during the morning rituals. Additionally it is proved that Goffman's dramaturgical theory is useful for researching ritual in schools. Specifically, his concepts of: *performance, audience segregation, impression management, setting, front, role distance as a role-play* and *self-presentation as a definition of the situation* are helpful for this examination of rituals which regards the behavior of children and teachers as a role-play and their classroom as a stage.

Finally the research methods employed are described. In addition to *participant observation* as used in qualitative sociology research, Bohnsack's *documentary method*, derived from Mannheim's *knowledge of sociology* and Garfinkel's *ethnomethodology*, was employed.

Key words

Dramaturgy, Performance, Ritual

Ⅰ　「ミクロな通過儀礼」としての「朝の会」と「週明けの儀礼」

本稿では、そもそもなぜ通過儀礼というテーマを取り上げるのか、どのような視点からその「ミクロな通過儀礼」という対象にアプローチするのかについて述べたい。

まずこの章では、なぜ通過儀礼に着目するのかという点について述べたい。そもそも通

＊たかまつ　みどり：大阪国際大学短期大学部講師〈2011.10.3受理〉

過儀礼とは何か。それは、人生の節目において、ある社会的な状態から別の状態へ人が移行する際に行われる儀礼であるが、それは近代学校教育制度の始まるずっと以前から、多くの文化において重要な教育機能を果たしてきた。

ヘネップによれば、個人の一生は、誕生・成人・結婚・親となること・死といったいくつかの段階からなる。階級の上昇や職業上の専門化もまた、一つの段階を構成するが、いずれにせよ通過儀礼は「個人をある特定のステータスから別の、やはり特定のステータスへと通過させる」ために[1)]、言い換えれば、前の段階と後の段階との差異を処理するために、存在する。

さらに、ヘネップは、通過儀礼を「分離儀礼」、「過渡儀礼」、そして「統合儀礼」という三つの段階に区分する。まず分離儀礼は、人が、それまで属していた共同体から切り離される段階である。次に過渡儀礼では、人はそれまで属していた共同体とそれ以後属することとなる共同体との境界線上に位置する。さらに統合儀礼は、人が新たな共同体に組み込まれる段階のことである。

ヘネップの挙げる例を見れば、たとえば葬式の際には、分離儀礼のモチーフがよく見られ、妊娠期間・婚約期間の儀礼・加入礼は過渡儀礼の要素が強く、結婚式には統合儀礼的な要素が頻繁に観察されるという[2)]。

ターナーは、ヘネップによる通過儀礼の上述の三段階のうち、とりわけ過渡儀礼に注目し、その際に「リミナリティー（境界性）」という特性や、さらにメンバーが社会的地位から比較的自由な「コムニタス」という平等な共同体が生じるとした。

まず、リミナリティーとは、ターナーによれば、「法や伝統や慣習や儀礼によって指定され配列された地位のあいだのどっちつかずのところ」にいる、境界上の人間のあいまいな属性のことである[3)]。つまり、この段階にある人は、それまでのアイデンティティを完全には失っていないものの、いまだ新たなアイデンティティを手に入れていない状態にある。

また、コムニタスとは、過渡期に生じる共同体で「儀礼の長老たちの一般的な権威にともに服従する平等な個人で構成される未組織の、ないしは組織が完全でない、そして相対的に未分化な」仲間集団としての社会のことである[4)]。とりわけ、「自然発生的コムニタス」[5)]は構造の外にあるとされるが、ターナーはこれを、ブーバーの言う「共同体」という言葉に置き換える。つまりそれは「もっとも純粋に、全人格的で具体的な人間のあいだの関係の一様式、我と汝のあいだの関係の一様式」であるという[6)]。ここでは、社会的な地位とは関係のない個人同士のつかの間の強い結びつきが生じ、さらには、社会的な地位や規範から自由な、より豊かなパフォーマンスが人々の間に見られるという。（ここに、すでに儀礼のパフォーマンスに着目するターナーの視点が表れているが、それは、後の彼の著作、*From Ritual to Theatre* のなかで、共同体のメンバーがその危機を乗り越えるために行う「社会劇」[7)]という形でさらに展開される。）

我々は普段、政治的・法的・経済的な地位によって組織化された社会に住んでいるが、ターナーによれば、人間の生活は、前者と後者、すなわちコムニタスと構造との弁証法的過程にある[8)]。つまり、人間が低い地位から高い地位へ移行するためには、地位のない過

渡期が必要なのである。「反構造」がなければ、我々が普段生活する構造化された社会も存在しない。ターナーの言葉で言えば、「通過儀礼では、人間は構造からコムニタスに解放され、そしてかれらのコムニタス経験によってふたたび活力をえた構造に戻る…(略)…いかなる社会もこの弁証法なしには適切に機能することができない」のである[9)]。

こう見れば、通過儀礼を、日常生活にプラスアルファとして行われる、補足的なイベントとして特徴づけるのみでは不十分であることが分かる。むしろ、そこに生じる、地位から離れた個人同士の結びつきや社会的な役割から自由なパフォーマンスの経験こそ、我々の組織化された日常の社会を背後で支えるものであるといえよう。

こうして、人間の社会生活にとって通過儀礼が必要不可欠であることが分かる。その重要さの割には、これまで教育学の分野で儀礼あるいは通過儀礼について取り上げた研究は数少ない。よって、本研究では、通過儀礼を研究対象とするが、ヘネップやターナーが考察した通過儀礼の例は、現在の先進国と呼ばれる国の教育制度である学校においても、観察することができると思われる。こうして、数少ないなかでも先行研究がすでに見られるのであるが、これについては稿を改めたい。筆者もこれまで、日本の小学校に見られる卒業式という通過儀礼について考察を行ったが[10)]、卒業式のように比較的大きなステップを乗り越えるために必要とされ、より大規模に、時には制度的に行われる儀礼を「マクロな通過儀礼」と呼んでおこう。

これに対して、本研究で問題とするのは、より小さなステップを乗り越える際に必要とされる、日々なにげなく習慣的に行われる「ミクロな通過儀礼」の方である。たとえばヴァーグナー＝ヴィリは、ベルリンの小学校において休憩時間から授業時間への移行段階に見られる相互行為を通過儀礼として捉え、実証的な事例研究をすでに行っている。

筆者もまた、大学で授業が始まる際の教員や学生の儀礼についてこれまで考察を行ったが[11)]、本研究では、「ミクロな通過儀礼」として日本の小学校に見られる「朝の会」とドイツの小学校に見られる「週明けの儀礼」を考察の対象としたい。というのも小学校でもまた、子どもが学校で一日を始めるためには、何らかの「ミクロな通過儀礼」（たとえば朝の会）を通して、「子ども」が小学校やクラスというシステムに取り込まれ、「児童」としてのアイデンティティを再び付与される必要があるからである。また、週の始めにも（たとえば月曜の会によって）、子どもは、家族や親戚、友人と過ごした週末の自分から離れ、「児童」としてのアイデンティティを付与された上で、学校あるいはクラスというシステムに再び取り込まれる必要があるからである。

Ⅱ　儀礼の「パフォーマンス」という視点―ゴッフマンのドラマトゥルギー―

本研究では、日本の小学校に見られる「朝の会」とドイツの小学校に見られる「月曜の会」というミクロな通過儀礼のパフォーマンス面に着目するが、そもそもそれはなぜなのか。これについてはターナーが説得力に富む説明を行っているので、本章の始めに見ておきたい。

これまでの儀礼研究では、主に儀礼参加者の相互行為の型の反復性や形式性が注目され

てきた。たとえばリーチは、儀礼を「典型的な振る舞い」として捉えるが、こういった固定的な見方に対し、ターナーは、儀礼の際に見られる「芸術的な呈示や表現」[12] を取り上げ、その創造性に目を向ける。彼によれば、確かに儀礼の表現の規則によって参加者にはその行為の「枠組み」が与えられるものの、その枠組み内で作り出される振る舞いや相互行為の「川」は、新たなシンボルや意味を生み出すこともあるという[13]。彼はおそらくここで、儀礼の形式性を表す比喩である「岸」[14] という言葉に対して、「川」という言葉で、特定の枠組みの中であっても状況によって突発的に行為を変化させることができるという、儀礼のパフォーマティヴな特質を表しているのであろう。

ターナーによれば、儀礼にはこれら二つの対立する特質、すなわち形式性や反復性と変容可能性という特質があるが、それらは対立しながらも「岸」と「川」のように相互依存的なものでもある。すなわち、相互行為の枠組みがまず存在しなければ、それを土台とした自由なアレンジの発想は生まれないし、逆に状況に合わせた柔軟な微調整や自由な即興演技がなければ、儀礼の行為の枠組みは硬直化して移り変わる状況に対応することができず、それはまた儀礼参加者にとって退屈なルーチンワークとなってしまうということであろう。よって我々は、儀礼の変容可能性という側面をも忘れてはならないのである。このように見れば、儀礼とは、同じ行為モデルの繰り返しとして、言い換えれば、単なるルーチンワークとして捉えられるべきではなく、状況に応じたパフォーマンスを通して絶えず作り替えられ、参加者が楽しみを得ることで活力を与えられていくものとして捉えるべきであろう。

このターナーの視点は、本研究に多くの示唆を与えた。たとえばベルリンの小学校で観察されたように、月曜の会で児童らが円になって座るなかで、一人の女児が鼻をかむために急に立ち上がり、円から外れたのを機に、他の児童もそれを模倣するように次から次へと円から外れ、その数が、座る児童を上回ったことがあった。この現象は、月曜の会自体がそれによって中断したというわけではないため、その儀礼で行われるべき相互行為の枠組みのなかで「岸」を破壊することなく突如として流れ出した「川」、つまり行為の新たなアレンジであると言える。このような相互行為は、リーチのような伝統的な儀礼研究の見方では、儀礼を妨害する危険のある、単なるアクシデントとしてしか捉えられないだろう。しかし、儀礼のパフォーマンスという視点から見れば、この新たな相互行為もまた共同体形成につながるため、一つの儀礼として捉えることができる。さらに言えば、それは、すなわちその相互行為の型が未だ反復されて定式化していないため、儀礼として定着するプロセスとして、すなわち、ヴルフの言う「儀礼化」[15] として捉えることができるのである。

以上のような理由から、本研究では日本やドイツの小学校に見られる「朝の会」や「月曜の会」が児童や教員によって「どのように」行われているかを考察するが、これまで、「パフォーマティヴなもの」については、様々な分野で様々な議論がなされ、かなりの理論的蓄積がある。

たとえばヴルフらは、そのパフォーマンス研究の理論的基盤として、オースティン、ハーバマス、デリダ、ブルデュー、バトラー、フーコー、ミード、ゴッフマン、ター

ナー、ゲバウアー・ヴルフの理論を取り上げ、儀礼研究を含む教育学研究にとって、彼らの視点がどのように有効かを明らかにしている。これらのうち、本研究と無関係ではないのは、上述のターナーの他に、「パフォーマティヴ（行為遂行的）」という概念を初めて言語学の分野で用いたオースティン[16]、彼の行為遂行的発言を受けて社会学の分野で、発話が行為としての効力を持ちうるための社会的な前提条件について考察したブルデュー[17]、ジェンダーがパフォーマンスによって身体化してゆくプロセスに着目した現代思想家バトラー[18] の理論である。

しかし、日常的なミクロの通過儀礼を分析するのに最適と思われるのは、アメリカの社会学者、ゴッフマンの視点である。というのも、微視社会学の先駆者として知られる彼は、より日常的で習慣的、無意図的なパフォーマンスに着目するからである。たとえば、彼の著作、『儀礼としての相互行為』の中でゴッフマンは、敬意表現やエチケットといった、グループに見られる多くの何気ない振る舞い方を儀礼として捉えようとする。

これまでゴッフマンの理論は、社会教育学や特別支援教育の分野で、どのようにスティグマが生じ、それとどうつきあうかという文脈で取り上げられてきた[19]。あるいは、相互行為秩序を分析するゴッフマンの手法は、学習・教授状況に見られる相互行為秩序の分析に用いられてきた[20]。バウシュによれば、ゴッフマンのパフォーマティヴな視点の特徴は、「何が」これらの状況において制度側から企てられるかということよりも、むしろ「どのように」教育行為が演じられ、またどのような効果をもって演じられるのかという点を明らかにするという点に存するとされる[21]。

とりわけ、ゴッフマンの理論が、近年再び見直されているのは、彼が「社会科学研究の焦点を、社会的な共同体が上演され生み出されるという側面へ、つまり社会的な共同体のパフォーマティヴな側面へとずらしたから」に他ならない[22]。

なかでも、『行為と演技』には、後に全作品を通して展開される、ゴッフマンの「基本的なパースペクティヴがもっとも明快に要約されて」おり、「ゴッフマン社会学の方法序説」と呼ばれる[23]。ドラマトゥルギー（行為を演出として捉える見方）がもっとも明確に表れるこの著作のなかで、ゴッフマンは日常生活に見られる自己呈示としてパフォーマンスを考察しており、そこで彼が提示した「パフォーマンス」・「役割演出」・「オーディエンスの分離」・「自己呈示」・「状況定義」・「印象操作」・「舞台装置」・「個人的外面」といった概念や、『出会い』における「役割距離」といった概念は、児童や教師の振る舞いを演技として、教室を舞台として捉えようとする本研究にとって有効であると思われる。よって以下では、まずこれらの概念を説明し、どのような意味でそれらが本研究にとって有効なのかを明らかにしたいと思う。

Ⅲ 「役割演出」としての「役割距離」、「状況定義」としての「自己呈示」

まずゴッフマンは「パフォーマンス」という概念を、「ある特定の機会にある特定の参加者がなんらかの仕方で他の参加者のだれかに影響を及ぼす挙動の一切」として定義す

る[24]。パフォーマンスを行う「チーム」は、その「オーディエンス」が自らの示す何気ないヒントを上演の重要な要素として受け取ってもらえると確信しているが、それらの要素は、逆にオーディエンスから誤解されることもある。

パフォーマンスの際に演じられるのは「役割」である。ゴッフマンの言う「役割 part, routine」[25] とは、状況に依存した、あらかじめ規定された行為のモデルであり、それは、パフォーマンスや他の機会に示され、演じられるものである。この「役割演出」という考え方は、ゴッフマンの演劇論に特徴的なものである。とりわけ社会における役割は、その人の地位や職業などと密接に関連しており、それは演じられることによって初めて、力を発揮する。ここでゴッフマンはサルトルを引き合いに出す。

> 「彼ら（商人）の身分はすべて儀式的なものである。公衆は彼らがその身分を一つの儀式として実現することを要求している。食料品屋、仕立て屋、競売人には、それぞれのダンスがある。それによって彼らは、その客に対して、彼らが食料品屋、仕立て屋、競売人より以外の何ものでもないことを納得させようとつとめる。」[26]

とりわけゴッフマンの理論では、自己呈示としての役割のパフォーマンスが問題となり、またそれが常に習慣的な演出のなかで習得される結果、自己が確立されるプロセスが問題となる。ゴッフマンの場合の自己とは、「人格（パースン）」であり、ミードの言うところの「me」であるが、オーディエンスの前で役割を演じることによって、その人は「社会的アイデンティティ」を確立する。ゴッフマンは、「人格（パースン）」が「仮面」という意味を併せ持っていることを指摘した、パークを引き合いに出す。

> 「パースン person という語の第一の意味が仮面であるのは、おそらく、たんなる歴史的偶然ではあるまい。いうならば、これは、人はだれでもつねにあらゆる場所で意識する度合いの差こそあれなんらかの役割を演じている、事実の認識なのである……われわれが互いに知り合うのは、まさしく役割においてある彼我であり、われわれが自分自身を知るのもまさしく役割においてあるわれわれなのである。」[27]

この仮面は、我々が達成したい理想的な自己であるが、それは他者に示されることによって、「第二の自然」[28] となり、我々の人格の重要な一部分となる。

他方で、この場合の自己の形成の仕方は、オーディエンスがチームのパフォーマンスをどう解釈するかにかかっている。ここには、バウシュも指摘するように、その解釈に委ねざるを得ない役割自己のもろさが表われている。これについては、ゴッフマンはすでに『アサイラム』や『スティグマ』で、傷つけられたアイデンティティとどうつきあうかという問題を考察している。

さらにゴッフマンによれば、一人の人間は、様々な仮面を持っているという。それらのうちどの仮面を選んで付けるかは、どのオーディエンスが自分の前にいるかにかかっている。その人は、それぞれのグループに、その都度異なる社会的アイデンティティを、つまりそれぞれに自己の違う側面を見せる。こうして個人は、バウシュによれば、「様々な役割自己のネットワーク」、あるいは「様々な役割自己の持ち株会社」となる[29]。

他方で、この複数の役割のためにチームは、ある役割を演じるべきか別の役割を演じる

べきか葛藤状態に陥ることがある。この問題は、チームが一つの役割を演じるのを観る人々と、別の役割を演じるのを観る人々とが重ならないように、オーディエンスを分けることによって、解決することができる。これがゴッフマンの言う、「オーディエンスの分離」である。その具体例として、彼はフランス系カナダ人の司祭が、海水浴場で泳ぐ場合などの私的な場で、彼の教区の信者が自分を観ていないか常に気をつけなければならないことを取り上げる。

> 「フランス系カナダ人の司祭のなかには、友人と海水浴にいけないほど厳格な生活をしたいとは思わないが、しかし自分の教区の信者ではない人たちと泳ぐのが最善と感ずる傾向のある人がいる。というのは海辺では避けようのない随意なさは、教区で必要な距離と敬意とは背馳するからである。」[30)]

このような方法を取るにせよ取らないにせよ、ゴッフマンの場合、個人は常に強制的に社会的状況に拘束されており、社会的役割のなかでのみ自己を演出したり呈示したりすることが可能である。

他方でゴッフマンは、『出会い』のなかで、社会的役割に対する批判の余地をも考慮に入れる。彼によれば、個人は確かにその役割から逃れることはできないものの、そこから距離を取ることができると言う。「役割距離」とは、その時演じている役割を自分のものとして全く認めないこと、あるいは部分的に認めないことである。この例としてゴッフマンは、メリーゴーランドに乗る子どもと主任医師の振る舞いを挙げる。

まず、かつてメリーゴーランドに熱中していた子どもは、５歳頃からメリーゴーランドの馬に乗る騎手としての役割から距離を取ることができるようになり、鞍の上に立ったり、横着な態度で馬の耳や尻尾をつかんだりするという[31)]。また、主任医師は、病院で看護師を褒めながら彼女の肩を気軽に叩くという形でその役割期待に背くことができる。

メリーゴーランドに乗る子どもにせよ、主任医師にせよ、こういった役割距離によって、人は、周囲からの役割期待に添う自己に回収されそうになりながらも、その演出の際に表れるつかの間の生き生きとした自己を感じ取り、確認することができる。というのも、我々は役割期待通りの役割演出を行うことで自己を確立するものの、それと同時に、自らの独自性は、その役割期待からどのように距離を取るかという微調整のなかでこそ感じられるものだからである。次のゴッフマンの言葉を見てみよう。

> 「何かに帰属せずしては確固たる自己をもてないが、さりとて、何にせよ社会的単位への全面的なコミットメントとアタッチメントは一種の自己喪失でもある。一個の人間であるというわれわれの意識がより大きい社会単位への帰属によってもたらされるものであるなら、われわれ自身であるという意識は、その大きな引力に抵抗する細々とした仕方に由来する。われわれの地位が世界の堅固な構築物に基礎づけられているとするなら、われわれの個人的なアイデンティティの感覚は、同じ世界の（ちょっとした）亀裂のなかに存在する。」[32)]

このゴッフマンの考え方は、社会的アイデンティティと個人的アイデンティティとの対比という形で、あるいはまた『アサイラム』の「第一次的調整 a primary adjustment」[33]と「第二次的調整 secondary adjustment」[34]という形で表れている。

いずれにせよ、人はより大きな社会単位への帰属という形で、人であることを確認することができるが、同時にそれへの小さな抵抗という形で（役割距離を通して）自らの独自性を確認することができる。

ここで注意しなければならないのは、役割距離が、役割批判的な振る舞いという形で現れるものの、ただその場合でも、社会の役割序列は支配的であるということである。上の例で言えば、主任医師はそういった気軽な振る舞いを許されるが、社会的地位の低い看護師が、逆に彼に対してそのように振る舞うことは許されない。

社会的地位の比較的高い者によるこういった役割の部分的否定は、ブルデューの言うところの「恩着せがましさの戦略」に通じるものがある[35]。この戦略によってその人は、自分の役割をかなりの程度否定することができるが、他方でそれを通してその定義を他者に認知させることもできる。

> 「それは、貴族階級の者が馬丁〔作法知らず、という侮蔑語でもある〕のお尻をポンとたたいたりする場合で、そうすると《あの人はシンプルだ〔お高くとまらない〕》などと評されるものですが、これは貴族階級の人間にしては、つまりその本質からして優越していて、その本質として原則的にそんな振る舞いに及ぶまじき人間にしては、ということを暗に意味しています。」[36]

こう考えれば、主任医師や貴族階級の者がたとえその役割から距離を取ったとしても、その役割がオーディエンスに認識されることに変わりはないことから、ゴッフマンの場合も役割距離が決して役割の放棄ではないことが分かる。

これについて、ゴッフマン自身、役割演出の現れ方として、パフォーマーが自分の役割を信じこんでいる場合の「真面目な」パフォーマンスと、パフォーマーが自分の役割に欺かれない場合の「醒めた」パフォーマンスを挙げている[37]。役割距離は、役割を演じることに変わりはないものの、その時のオーディエンスからの役割期待に沿わない形での役割演出なのである。

確かに、先のゴッフマンの二つの例を見ても、メリーゴーランドの馬に乗る子どもも、主任医師も、周囲が許さないほどの突飛な振る舞いをしているわけではない。

坂本もまた、役割距離概念が、役割期待、言い換えれば規範そのものの変更を含むものではない点を指摘し、社会からの束縛・規範に対する、個人のささやかな抵抗として捉える、それまでの見方を次のような形で修正する。

まず坂本は、ゴッフマンの役割距離概念に、二重の自己（役割期待通りに演じられる「公共的自己」とそれを陰で操作する「私的自己」）が見られることを指摘する[38]。その上で、これらの自己を社会対個人という対立軸に置かない点にこそ、ゴッフマンとシンボリック・インタラクショニズムとの決定的な相違があるとする[39]。彼女によれば、ゴッフマンの場合、公共的自己と私的自己との対立は、社会規範と自由選択の対立ではなく、「すでに存在する社会規範を前提としたうえで、当該の状況でいかなる規範を選択するかとい

う、状況定義の一部としての『自己』の選択の問題」であるという[40]。これまでゴッフマンの著作は、一般に、社会対個人の問題を扱う初期の自己呈示論と社会の文化構造の問題を扱う後期の状況定義論に分けられてきたが、坂本によれば、むしろゴッフマンは、「初期のころから状況定義に関心をもっており、自己呈示論を状況定義論の一環としてさえ位置づけることができる」という[41]。

「状況」とはゴッフマンがフィールドとした物理的な場所のことであるが[42]、坂本のここでの主張は、主に次の二つの点に集約される。第一に、役割距離を、社会規範に対する個人の小さな抵抗として見るのではなく、すでにある社会規範のなかから状況ごとに選択する自由として見なければならないということ。第二に、ゴッフマンの役割距離をはじめとする自己呈示を、状況定義の一部として捉えなければならないという点である。

以下ではそれぞれの主張について検討したい。

まず一点目について。坂本の主張には頷ける。というのも次のゴッフマンの記述を見れば、彼自身、個人が社会に対して抵抗するプロセスにはそれほど興味がなかったことが分かるからである。

> 「しばしば社会で言われるほどには、その状況にいる人びとが定義を作り出すことなどあり得ない。人びとにできることと言えば、せいぜい自分にとってその状況がいかなるものであるかを正確に知り、それに応じる行為をするだけのことである。」[43]

個人が社会に抵抗するというよりは、むしろゴッフマンは、個人が役割距離によって、集団に相互行為をさらに維持させるという逆の方向の機能に光を当てている。

役割距離は、演じるチーム自らの精神的負担を軽減するだけではなく、他のオーディエンスの精神的負担をも軽減し、そのグループがさらなる相互行為を続けるためのガス抜きとして機能しているのである。これについて大村は次のように述べる。

> 「一方では、目前の息がつまるような機能的世界を共謀して支えながら、しかも同時に他方では、自分はもちろん、同席している仲間をもこの息がつまるような目前の事態から解放できる点に『役割距離』の呈示がもつ重大な意義がある。」[44]

これに関してゴッフマン自身の記述を要約すれば、次のようになる。

> 「役割距離の呈示は、所与の状況システムに閉じこめられているこの『私』を嫌って、そうでない『私』をも同時に表出する一つの仕方である。……単なるサーヴィス提供者でありながら、しかもそうでない一人のひとがこのように表明されることで、これを識別できた彼の仲間は、さもなくば自分が先にもっときつい仕方でぶちこわしたであろう彼ら自身についてのイメージも、何とか我慢することもできるのである。」[45]

よって本研究では、役割距離を社会に対する個人の抵抗として捉えるのではなく、集団が相互行為を維持するためのガス抜きとして捉えることとする。

坂本の述べていた二点目、役割距離をはじめとする自己呈示が、状況定義の一部であるという点について。以下のゴッフマンの記述を見れば、坂本のこの主張にも頷ける。

「個人が他者の前に現れるとき、彼は意識的にも、無意識的にも、彼の自己概念がその重要な一部をなしている一つの状況の定義を投企している。」[46)]

「個人についての情報は、彼が人びとに何を期待し、彼らは彼に何を期待してもよいかをあらかじめ知らせ、状況を定義するのに役立つのである。」[47)]

オーディエンスがチームを理解するヒントが、チームからあらかじめ呈示されることはすでに述べたが、ここではさらに、それを見てオーディエンスがチームについて理解し、チームを含めたその場がどのような場であるかを知るということまで言われている。さらに、そのように定義された状況のなかで、オーディエンスは自己呈示のあり方を規定される。こうして人は、自らの自己呈示を通して、オーディエンスの状況定義や彼らによる自己呈示に影響を与えるのである。

こう考えれば、自己呈示の問題は、個人レヴェルのものとして捉えるのは不十分であることが分かる。というのも、相互行為グループにおいて、チームの演技はその場と切り離せるものではなく、他のオーディエンスによる場の理解に大きな影響を与え、彼らの自己呈示をも規定するからである。

坂本の主張については以上の通りであるが、このように考えれば、役割演出としての役割距離や、状況定義としての自己呈示といったゴッフマンの視点は[48)]、本研究にとっても以下の問いの解明に役立つと思われる。

①まず、朝の会や月曜の会というミクロな通過儀礼のなかで、子どもは家庭や仲間集団における役割から切り離され、児童としての役割を再び演じることが想定される。上述の視点から、子どもがその役割を「どのように」演じるのか、あるいは「どのように」その役割から距離を取り、「機能的世界」としての朝の会や月曜の会を維持するのか。

②子どもはまたこの通過儀礼の際に、児童としての役割だけでなく、「日直（朝の会）」、「話し手（月曜の会）」、「仲間集団の一員」といった役割も演じると思われる。彼らはそれらを「どのように」演出しているか、あるいは「どのように」そこから距離を取ることで儀礼を持続させているだろうか。

③さらに、朝の会、月曜の会という状況が、児童や教師の自己呈示を通して「どのように」定義され、維持されているだろうか。

Ⅳ　状況定義としての「印象操作」、「相互行為儀礼」

大村は、上述の坂本とは異なった形でゴッフマンの全著作を三つの時期に区分するものの[48)]、その主張は坂本のものと部分的に重なり、中期のゴッフマンのドラマトゥルギーを初期や後期の問題意識から切り離して解釈してはならないとする。よって以下では、前章に続いて坂本や大村の指摘を考慮し、ゴッフマンが後期の著作で考察した状況定義という視点から、中期のドラマトゥルギーを読むこととする。たとえばドラマトゥルギーのなかでよく知られている「印象操作」は、どのように解釈できるだろうか。

ゴッフマンによれば、チームは、パフォーマンスの際にオーディエンスが良い印象を持ってくれるように、意識的あるいは無意識的にその役割を表現することが多いという（「印象操作 impression management」）[49]。

まず、印象操作の際に決定的な役割を果たすのは「外面 front」[50] である。外面は、ゴッフマンによれば、「観察する人びとに対して状況を一般的・固定的仕方で反復規定する機能をもつ」[51]。この文章にも、自己呈示が状況定義につながることが表れているが、外面を操作することによってチームは自己呈示を行い、それを通してその場がどのような場であるかをオーディエンスに理解させるのである。

外面には「舞台装置 setting」と「個人的外面 personal front」がある[52]。

A）舞台装置とは、家具や装飾品など、パフォーマンスの「小道具」や「大道具」となるものである。

B）個人的外面とは、人が他者に見せるために常に身につけているものである。たとえば、地位ないし位を示す記章・服装・性・年齢・人種的特徴・身体の大きさ・容貌・姿態・言葉づかい・表情・身振りなどがある。

これらの外面を管理することによって、チームはオーディエンスに好印象を与えようとする。また、それによって、チームは自分の挙動に記号を付与し、そうしなければ気づかれないかあいまいであるような事実を劇的に際立たせ、それに輪郭を与えることが可能である（「劇的具象化 dramatic realization」）。

さらに、チームは外面の助けを借りて、オーディエンスに自分の理想の姿を示し、その理想像と相容れないような挙動や事実を隠すか、少なくとも目立たないようにすることができる（「理想化 idealization」）。

このようにして印象操作は行われるが、前章の坂本の指摘を考慮すれば、この時、個人は理想的な自己を呈示するだけではなく、それと同時に、相互行為の状況を相互行為参加者が維持しやすい形で一義的に定義してもいるのである。

さて、上述の舞台装置（大道具や小道具）と個人的外面（服装や言葉遣い、身振りなど）は通常、チームの呈示する自己像やそれによって定義される状況と整合したものである。しかしながら、このような外面の整合性は、それと矛盾するわずかなチームの何気ない仕草によって危険にさらされることもある。パフォーマンスのリアリティとは、まさに「ごくささいな不運な出来事でこなごなになりかねない繊細な壊れ物」なのである[53]。したがってチームにとって問題となるのは、もしそれらに注意が向けられれば彼がオーディエンスに抱かせようとしている印象に不信感を抱かせかねない「破壊的情報」を、どのように統制するかということである。

前章の坂本の指摘を考慮すれば、自己呈示の危機は状況定義の危機でもあるため、破壊的情報は個人の自己像を危険に晒すだけでなく、それまで維持されていた状況定義をも危険に晒すこととなる。

以上のことを踏まえれば、本稿で問題となるのは、上述の３点に加えて、次の３点である。

④本研究では、日本とドイツの小学校の教室が舞台となるため、児童や教員が印象操作の際に用いる舞台装置（大道具や小道具）となる物は限られているかもしれない。それでも児童や教員は朝の会や月曜の会の際に、何らかの物を用いるであろう。「どのように」彼らは、大道具や小道具を用い、理想的な共同体を形成するだろうか。

⑤また、児童や教員の個人的外面のうち、服装・人種的特徴（ドイツ以外の国籍の児童の多いベルリンの場合）・言葉使い・表情・身振りは、舞台装置よりも多様であると思われるが、彼らはそれらの力を借りて、「どのように」理想的な「朝の会」や「月曜の会」を演出しているだろうか。また、それを通して「どのように」朝の会や月曜の会の状況を定義し、その定義を維持しているだろうか。

⑥印象操作の際に児童や教員に用いられる舞台装置（大道具や小道具）と個人的外面（服装・言葉使いなど）との間に整合性が見られない場合があるだろうか。この時、彼らは「どのように」その不整合に対処しているだろうか。また、彼らの自己呈示や状況定義に異議を唱えるような破壊的情報は、「どのように」処理されているだろうか。

椎野もまた、上述の坂本や大村と同様、近年、ゴッフマンのドラマトゥルギーを状況定義の問題として捉え直している。椎野によれば、舞台用語を用いてドラマトゥルギーを展開したゴッフマンの関心が「日常生活に忍び込んでいる劇場の諸相の抽出にあったと誤解してはなら」ず、彼の関心はあくまでも「〈間身体的行為〉[54] に関する規範・規則を記述すること、つまり〈間身体的行為〉の秩序構造を分析すること」にあったという[55]。

以上のことは、ゴッフマンの次の言葉から明らかである。

> 「舞台の用語と仮面は放棄される。足場は、つまるところ別のものを建てるためのものであり、いつかそれを取り壊すことになるのだということを見通して組み立てられるべきものなのである。この報告の関心事は、日常生活に忍び込んでいる劇場的諸側面ではない。この報告の関心事は、社会的出会いの構造―社会生活において、人びとが互いに直接肉体をもった者として人前にでたときに存在し始めるようなさまざまの事象の構造―である。この構造の核心的因子は、状況に関して単一の定義を維持すること、すなわちこのような定義は表出されねばならず、またこのような定義は無数の潜在的攪乱のただなかで維持されねばならない、ということである。」[56]

順序が前後するが、まず引用後半の文章、「社会生活において、人びとが互いに直接肉体をもった者として人前にでたときに存在し始めるようなさまざまの事象の構造」とは、上述の椎野の言う「間身体的行為の秩序構造」、すなわち身体と身体が独自に有する規則のことであろう。驚くべきことに、これまで見てきたゴッフマンの舞台用語は、相互行為の秩序構造を観察するための足場にすぎなかったのだ。よって本研究でも、朝の会や月曜の会のシーンを分析する際には、足場を組み立てること（ゴッフマンの舞台用語の適用）に満足するのではなく、それを用いた建物作り（相互行為の秩序構造の分析）に励まなければならない。その秩序構造の主要なものとして、ゴッフマンは上の文章で「状況に関して単一の定義を維持すること」を挙げている。なぜ単一の状況定義の維持が必要なのかと

言えば、おそらくもし状況内の行為者たちの間で場の理解が大幅に食い違っていれば、円滑な相互行為は望めないからであろう。いずれにせよ、引用の最後の文章を見れば、その単一の状況定義は参加者に向けて「表出」されることで初めて、その存在が明らかとなり、さらに維持されるものである。さらに同じ文章にある「無数の潜在的攪乱」とは、上述の破壊的情報や、不整合な外面を指すのであろう。

このことを論証するために、さらに椎野は、次のゴッフマンの二つの文章を引き合いに出す。

> 「世界のすべてが舞台であるわけではないのであり、通常は劇場の演技と日常の相互行為は根本的に異なるリアリティとみなされている。けれども、世界が舞台ではないという決定的な点を特定することも容易なことではない。」[57)]
>
> 「状況の定義を“表出上”維持する技法は、劇場の舞台であれ日常生活の現実であれ、対面的相互行為＝〈間身体的行為〉の秩序構造という観点でみれば同一のものである」[58)]

椎野は、これらをつなげて解釈し、ゴッフマンのパフォーマンスの社会学の中心課題が「パフォーマンスとしての〈間身体的行為〉の秩序構造、つまり間身体レヴェルにおいて単一の状況の定義を維持する技法・装置の記述にある」とする[59)]。

こうして、ゴッフマンの関心は、単一の状況定義をいかに維持するかという問題へ向かう。確かに、実際の相互行為では、ある個人によって定義された状況が、参加者ごとに少しずつ異なって理解されるのが通常であり、その場合複数の状況定義が存在することとなる。しかし、ゴッフマンによれば通常個人には、「他者たちに少なくとも一時的には容認可能であると思われるような状況の定義を投企するように期待されていて、さらに各参加者は目前の他者たちの投企した状況の定義を容認する傾向がある」ため、複数の状況定義は矛盾として表れない[60)]。

さらに特筆すべきは、この状況定義の単一性が、他の参加者の思考を通して得られる単一性ではなく、参加者の身体表現によって、その都度パフォーマティヴに設定され、維持される性質のものだということである。椎野の言葉を借りればその単一性は、「〈間身体的行為〉の場においてまさに身体表現行為の遂行自体によって成立しており」、「暫定的」、「作業的に」設定される[61)]。換言すれば、それは「参加者たちの内部で成立してから〈間身体的行為〉を遂行するものではなく、遂行している〈間身体的行為〉において同時に維持されている」ものである[62)]。この「暫定協定」のことをゴッフマンは「作業合意」と呼ぶが[63)]、いずれにせよ、ここにはゴッフマンのパフォーマティヴな視点が明確に表れている。

そして、このような単一の状況定義のための暫定協定こそ、ゴッフマンが後の著作で「相互行為儀礼」と名づけた道徳原理に他ならない。よって以下では本章の最後に、ゴッフマンの相互行為儀礼について触れておきたい。

ゴッフマンによれば、あらゆる相互行為の参加者たちは相互の聖なる人格を尊重するという儀礼規則を暗黙に遵守して行為している。相互行為が成立するためには、仮に相互行為の儀礼秩序を破るような違反行為が発生したならば、その儀礼秩序を回復させるような

矯正・補償手段が用いられるように、相互行為が仕組まれていることが必要である。

こうした儀礼の中心に、フェイス・ワークがある。相互行為においては他者と自分のフェイス（面子、面目、体面）を保持するように行為するというのが儀礼原理である。相互行為を続けるためには、自他に対して自己イメージとしてのフェイスを神聖なものとして注意して取り扱わなければならない。フェイスを保持する儀礼行為には、他者のフェイスに対する評価を伝える「表敬」と、自己のフェイスの保持を表現する「品行」がある。フェイスを維持するために、諸個人は他者たちと接触している間は品行よく振る舞い、表敬をもって他者たちに扱われるように行為する。

私見によれば、他者のフェイスを尊重するということは、他者の自己呈示に自己が合わせる（あるいは少なくとも意義を唱えない）ことであり、さらには、そのような他者のいる場がどのような場であるか理解すること（状況定義）につながるのであろう。「表敬」は、自己が他者の自己呈示を認めて表現することであり、「品行」は自己による（自己）呈示を他者が受け入れやすくすることであると解釈することができる。

以上見たように、ゴッフマンの中心課題は、間身体的行為を背後で支える規範原理を発見することにあった。ゴッフマンが注目した間身体的行為という社会学的単位は、椎野によれば「社会の問題や人間の問題を考察する際に非常に参考になる重要な出来事が数多く生起している領域であるが、その出来事・事象・現象を記述するための社会学的用語が未だ整備されていない」という[64]。その試みの一つが上述のような椎野の試みであり、彼はゴッフマンの諸概念（パフォーマンス・自己呈示・状況定義・作業合意・儀礼・フェイスなど）を、状況用語として捉えたのであった[65]。

確かに、我々は通常、自己と相手との間に道徳的な取り決めがあることを意識することなく、相互行為を行っている。相手の顔を潰さないというマナーは、意識的な行為だと思われがちであるが、日常の相互行為ではそれを特に意識することなく他のメンバーに同調している。この時、あえてあるメンバーの顔を潰すこともない。万が一あるメンバーが他のメンバーの顔を潰すことがあっても、それ以外のメンバーがそれとなく取り繕うことが多い。おそらくゴッフマンはこういった言葉（「特に意識することなく…、あえて…することなく…、それとなく…」）で表すことができるような無意識の身体レヴェルの行為を「相互行為儀礼」という概念で捉えようとしたのだろう。

相手の体面を傷つけることなく相手に同調するというのは、一見、没個性的なようにも見えるが、ゴッフマンであればおそらく逆の考え方をするだろう。というのも彼の場合、相互行為儀礼のなかで、状況に即した自己を表現することによってはじめて、人はパフォーマティヴに自己を確認することができるからである[66]。こう考えれば、相互行為儀礼こそ、個人が自己を確認するために不可欠であると言える。

以上のことを踏まえれば、上述の６つの問いに加えて、さらに次の問いが探求されなければならないだろう。

⑦朝の会や月曜の会においては、たとえば、今この時が校内であり、授業中であり、朝の会あるいは月曜の会の最中であるという単一の状況定義や、教員が権威者であるといった単一の状況定義が維持され続けなければならないが、「どのように」その単一

の状況定義はパフォーマティヴに設定され、維持されるのだろうか。また、その単一の状況定義と相容れないような破壊情報は、「どのように」処理されるのだろうか。

⑧相互行為儀礼は「どのように」行われるだろうか。換言すれば、児童や教員は「どのように」自他のフェイスを保ち、互いの自己呈示を認めて表現し、それに即した状況定義を維持しあっているだろうか。

Ⅴ　今後の研究にむけて、共同体概念について

本研究では、社会学的質的方法のうち参与観察に加えて、マンハイムの知識社会学とガーフィンケルのエスノメソドロジーの流れを汲む、社会学者ボーンザックのドキュメンタリー方法のビデオ分析を行う。その前段階として、本章ではボーンザックの方法について手短に触れておきたい。

儀礼を行うのに必要な実践的な知識はそれぞれの共同体に独自のものであるが、それは説明を通して学習される類のものではない。それは儀礼を繰り返すうちにいつの間にか身についてしまうようなハビトゥス化された知識である。すでに20年代にマンハイムは、行為者が有する知の形態を二つに分けている。一つは、思考を通した合理的な「伝達的認識 kommunikatives Erkennen」であり、もう一つは、相手との相互行為のなか、行為モデルを身につけるなかで養われる、上述のような「接続的認識 konjunktives Erkennen」である。ドキュメンタリー方法は、特にこの後者の知識形態に焦点を当てる。この知識は、特定の共同体における今ここの状況、マンハイムの言葉で言えば「接続的な経験空間 konjunktiver Erfahrungsraum」を共に体験し、実存的に関わり合う私達のみが知っている、感覚的、身体的な実践知であり、逆にそれを共有していない者に伝達することのできないものである[67]。

マンハイムが、社会的現実とは「何か」ということよりも、行為者達が社会的現実を「どのように」作り出していくかということに着目したように[68]、接続的認識の考察の際にもまた、行為者の振る舞いの根底にある、行為者を行為へと方向付けるハビトゥスが問われる。

本研究では朝の会や月曜の会のパフォーマンスに着目するため、「どのように」行為が遂行されるかを追求してきた、ドキュメンタリー方法は最適であるといえる。

ドキュメンタリー方法には、会話分析やグループディスカッション、写真分析やビデオ分析があるが、いずれの場合もデータを分析する際には、上述のマンハイムによる知の二形態が考慮に入れられる。まず、第一段階の「記述的解釈 Die formulierende Interpretation」の際には、「何が」テーマとなっているかという一般化可能な「伝達的認識」が問われ、第二段階の「省察的解釈 Die reflektierende Interpretation」の際には、参加者達に「どのように」テーマが取り上げられているかという、参加者達のその場独自の「接続的認識」が問われ、そこでの行為の奥に潜むハビトゥスが明らかにされる。つまり「その表現に、表現者や彼らの振る舞いに関して何が表れているのか sich dokumentieren」を探求する方法がドキュメンタリー方法に他ならない[69]。

ボーンザックは、写真分析の場合、西洋美術史の分野からパノフスキーのイコノロジー（図像解釈学）と、それに対するイムダールによる批判（イコニック）を引き合いに出していたが、それらに加えて、ビデオ分析の場合には、映画学者、バラージュの映画理論が取り上げられる。バラージュは、*Der Geist des Films* の中で他の芸術作品に見られない、映画独自の表現方法として、三つの手法を挙げる。それが、クローズアップ、アングル、そしてモンタージュの三つである。

しかし本研究で取り上げるビデオ資料にはクローズアップが見られず、また編集されたものではないためモンタージュも存在しない。よって今後は、対象のどの面にどの方向から撮るかを定める「アングル Einstellung」のみを考察する。というのも、このアングルによって、同じ対象でも全く異なった形で映すことができ、その映し方にこそカメラマンの解釈が表れるからである。

ところで、マンハイムが述べていたように、知識をその共有の仕方によって「伝達的知識」と「接続的知識」という二形態に分けることができるとすれば、それを共有する共同体にも二つの形態があるはずである。一つは、合理的で、伝達可能、一般化も可能な知識に基づく「伝達的な経験空間」を共有する共同体であり、もう一つは、身体的、慣習的で一般化できない知識に基づく「接続的経験空間」を共有する共同体である。

このように考えるならば、一言で「共同体」と言っても、「～組の児童」という社会的役割に基づく共同体と、似た者同士が集まり類似した服装・髪型をする「友達グループ」というハビトゥスに基づく共同体とは、共有する知識の性質上、異なる種類のものであることが分かってくる。よって本研究では今後、共同体が伝達的なレヴェルにあるのか、接続的なレヴェルにあるのかによって区分することとする。

(Endnotes)

1）ヘネップ（綾部恒雄、綾部裕子訳）『通過儀礼』、弘文堂、1995年、３頁。
2）ヘネップ、前掲書、９頁。
3）ターナー（冨倉光雄訳）『儀礼の過程』、新思索社、1976年、126頁。
4）ターナー、前掲書、128頁。
5）ターナー、前掲書、182～183頁。
6）ターナー、前掲書、189頁。
7）「社会劇」とは「決裂、危機、克服、再統合、あるいは分裂の承認」といったプロセスからなる、共同体における危機克服のメカニズムである（Turner, Victor Witter, *Vom Ritual zum Theater*, Der Ernst des menschlichen Spiels, Frankfurt am Main, New York, S. 108.）。まず、第一の「決裂」の段階では、共同体（家庭、国家、国際的・宗教的・政治的な諸制度）において、「社会的な規範、道徳的な規則、法律、慣習や礼儀作法が公に破られる」（Ebd., S. 110.）。次の段階では、共同体において「危機」が明らかとなり、党派や分派が作られる。第三の「克服」の段階では、該当集団の指導層が、決裂を広めないように特定の「適応メカニズムないし克服メカニズム」に着手する（Ebd., S. 111.）。その例としては、「個別的な助言、非公式の調停の試み、公式の法律上・裁判上の手続き、公的な儀礼の実行」などがある。最後の段階は「社会グループ同士の再統合」か「競合する党派同士の埋めることのできない溝の社会的承認」の段階であり（Ebd., S. 112.）、該当グループ同士の和解ないし最終的な決裂が公的な儀式のなかで表現される。
8）ターナー（冨倉光雄訳）『儀礼の過程』、新思索社、1976年、129頁。

9）ターナー、前掲書、176～177頁。

10）筆者は、ドイツの社会学者、ボーンザックのドキュメンタリー方法を用いて、小学校における卒業式という通過儀礼が「どのように」実践されているかを、写真分析によって明らかにした（Takamatsu, Midori, “Die Inszenierung des Austrittsrituals in der japanischen Grundschule-Eine Fotoanalyse auf der Grundlage der dokumentarischen Methode-,” *Jahresheft der Pädagogik* 11, Universität Osaka, 2006.）。ここでは、象徴解釈や機能解釈に重点の置かれてきたこれまでの儀礼研究に対して、ドイツの教育学者、ヴルフの儀礼研究と同様、儀礼が「どのように」行われるかという視点から卒業式の儀礼の一場面を考察した。

11）大学で授業を始める際にも、学生の側にも教員の側にも何らかの構えが必要であり、教員は、小さな振る舞いあるいは相互行為を通して、授業の始まりを学生に告げ、学生は授業の準備ができていることを教員や他の学生に示したり、自ら確認したりする必要がある（Takamatsu, Midori, Eine Untersuchung über rituelle Handlungen vor dem Unterricht an der Universität, *Jahresheft der Pädagogik* 8, Universität Osaka, 2003.）。筆者は、すでにこの論文で、授業開始時の儀礼が教員や学生によって演じられるプロセスに着眼した。

12）Turner, Victor Witter, *Vom Ritual zum Theater*, Der Ernst des menschlichen Spiels, Fischer, Frankfurt am Main, 1982, S. 126.

13）Ebd., S. 127.

14）Ebd., S. 126.

15）Wulf, Christoph & Althans, Birgit & Audehm, Kathrin & Bausch, Constanze & Göhlich, Michael & Sting, Stephan & Tervooren, Anna & Wagner-Willi, Monika & Zirfas, Jörg, *Das Soziale als Ritual*, Leske+Budrich, Opladen, 2001.

16）オースティンは彼の言語行為論、『言語と行為』のなかで、事象を記述したり報告したりする「事実確認的発言 constate」に対して、「発言を行うことがとりもなおさず、何らかの行為を遂行する」ような発話を、「行為遂行的発言 performative」と名づけている（オースティン〈坂本百大訳〉『言語と行為』、大修館出版、1978年、10～12頁）。この具体例として、彼は、結婚式の進行中に花婿と花嫁が述べる「はい」という発言や、船を命名する際の発言を取り上げる（オースティン、前掲書、10頁）。彼によれば、事実確認的発言ではその発言が真か偽かということが問題となるが、行為遂行的発言の場合は、それが適切か不適切かということが問題となる。

17）ブルデューによれば、「制定行為の魔術的効力は、言葉の魔術が成就するために満たされねばならない（金銭、場所、時といった）諸条件を規定する機関＝制度の存在と不可分」であるという（ブルデュー〈稲賀繁美訳〉『話すということ　言語的交換のエコノミー』、藤原書店、1993年、82頁）。つまり、制度的に名づける権利をすでに与えられている者は、名づけた「名前」が効力を持ちうる（発話がパフォーマティヴでありうる）が、逆に名づける者に名づける権利が公認されていなければ、その言葉は効力を持たない（発話がパフォーマティヴでない）のである。

18）バトラーによれば「ジェンダーは結局、パフォーマティヴなものである。つまり、そういう風に語られたアイデンティティを構築していくものである。この意味でジェンダーはつねに『おこなうこと』であるが、しかしその行為は、行為のまえに存在すると考えられる主体によっておこなわれるものではない」という（バトラー〈竹村和子訳〉、『ジェンダートラブル　フェミニズムとアイデンティティの攪乱』、青土社、1999年、58頁）。つまり、先にあるのが男性らしいあるいは女性らしい身振りであり、それが習慣的に反復されることによって、男性や女性というアイデンティティが後から構築されるのである。

19）Thiersch, Hans, *Kritik und Handeln*, Interaktionistische Aspekte der Sozialpädagogik, Neuwied, Darmstadt, 1977.
田中理恵『家族崩壊と子どものスティグマ　家族崩壊後の子どもの社会化研究』、九州大学出版会、2004年。

20）Hausmann, Gottfried, *Didaktik als Dramaturgie des Unterrichts*, Heidelberg, 1959. Wellendorf, Franz, *Schulische Sozialisation und Identität*. Zur Sozialpsychologie der Schule als Institution, Weinheim, Basel, 1973.

21）Bausch, Constanze, „Die Inszenierung des Sozialen," Erving Goffman und das Performative. In: Wulf, Christoph & Göhlich, Michael & Zirfas, Jörg (Hrsg.), *Grundlagen des Performativen*, Juventa Verlag, Weinheim und München, 2001, S. 222.
22）Ebd., S. 203.
23）吉見俊哉、杉山光信編『現代社会学の名著』、中央公論社、1989年、180頁。
24）Goffman, Erving, *The Presentation of Self in Everyday Life*, Doubleday, New York, 1959, p15.
25）Ibid., p16.
26）Ibid., p106.
27）Ibid., p249.
28）Ibid., p21.
29）Bausch, Constanze, „Die Inszenierung des Sozialen, Erving Goffman und das Performative", In: Wulf, Christoph & Göhlich, Michael & Zirfas, Jörg (Hrsg.), *Grundlagen des Performativen*, Juventa Verlag, Weinheim und München, 2001, S. 210.
30）Goffman, Erving, *The Presentation of Self in Everyday Life*, Doubleday, New York, 1959, p137.
31）Goffman Erving, *Encounter*, two studies in the sociology of interaction, New York, 1961.
32）Goffman, Erving, *Asylums*, Essays on the Situation of Mental Patients and Other Inmates, New York, 1961, p320.
33）全制的施設における個人の適応段階のうち第一次調整とは、ゴッフマンによれば人が「そうあるように予定されている存在様態に過不足ないありようをするように公式に要求されていること、さらに彼と事実上親和的な世界に住むことを余儀なくされていることを認める」段階のことである（Ibid., S. 189）。
34）ゴッフマンは第二次調整を次のように定義する。「第二次調整とは、特定の組織内の個人が非公認の手段を用いるか、あるいは非公認の目的を達するか、あるいは双方を同時にするかして、彼の為すべきこと、得るべきもの、かくして彼の本来の存在様態とされているものなどをめぐる組織の非明示的仮定を回避することと定義される。第二次的調整とは、施設が個人に対して自明としている役割や自己から彼が距離を置く際に用いる様々な手だてのことである。」（Ibid., S. 189）
35）ブルデュー（稲賀繁美訳）『話すということ』、藤原書店、1993年、152頁。
36）同上。
37）Goffman, Erving, *The Presentation of Self in Everyday Life*, Doubleday, New York, 1959, pp17-19.
38）坂本佳鶴恵、『アイデンティティの権力　差別を語る主体は成立するか』、新曜社、2005年、161頁。
39）坂本、前掲書、同頁。
40）坂本、前掲書、163頁。
41）坂本、前掲書、168頁。
42）「状況」とは、建物や施設の内部のように、知覚上物理的に固定した障壁や境界に囲まれた空間環境のことである。ゴッフマンはそこで規則的に組織される人々の社会的行為を研究対象とした（Goffman, Erving, *Behavior in Public Places*, Notes on the Social Organization of Gatherings, New York, 1963, p18）。
43）Goffman, Erving, *Frame Analysis: An Essay on the Organization of Experience*, Harper & Row, 1974.
44）大村英昭「儀礼と演技―ゴフマンの社会理論―」、中久郎編『現代社会学の諸理論』、世界思想社、1990年、145頁。
45）Goffman, Erving, 1961, pp106-108.
46）Goffman Erving, *The Presentation of Self in Everyday Life*, New York, 1959, p242.
47）Goffman, Erving, ibid., p１.
48）大村はゴッフマンの全著作を次の三つの時期に分ける。
①デュルケームらの分析視角を取り入れ、そのタブー論ないし儀礼論を現代市民社会論として展

開した時期
②ゲーム理論の新たな展開などに触発されて、初期の儀礼論にパラフレーズし、とりわけ日常生活における対人的な「印象操作」を一種の相互作用戦略として俎上にのせた時期
③記号論ないし行為＝記号論的分析視角にのせて、ジェームズあるいはシュッツ以来の多元的現実論を独自な仕方で再構成していった時期
大村によれば、多くの社会学者、たとえばグールドナー（1975）やロフランド（1980）が、中期の著作のみを他の著作から切り離して取り上げたため、ゴッフマンの社会学を誤解してきたという。（大村英昭「儀礼と演技―ゴフマンの社会理論―」、中久郎編『現代社会学の諸理論』、世界思想社、1990年、140頁。）

49）Goffman, Erving, *The Presentation of Self in Everyday Life*, New York, 1959, p208.
50）Ibid., p22.
51）Ibid.
52）Ibid., pp22-24.
53）Ibid., p56.
54）周知のようにゴッフマンは「対面的相互行為」を研究対象としたと言われるが、これに対し椎野は、近年の論文のなかで、顔と顔をつきあわせた相互行為のみを意味する「対面的相互行為」という名称が不適切であるとする（椎野信雄「ドラマトゥルギィから相互行為秩序へ」、安川一編『ゴフマン世界の再構成　共在の技法と秩序』世界思想社、1991年、36頁）。というのもゴッフマンは、他者の存在を知覚した瞬間から周りに人が知覚されなくなるまでに生じる身体行為すべてを考察対象としたからである（椎野、前掲書、同頁。）。椎野は、その言葉の代わりに、さらに広い意味を持つ「間身体的行為」という言葉を用いる。というのも「状況のなかで身体的に集合として居合わせている人びとの身体と身体の間で相互に行われている行為は、個人の『意識』のレヴェルで生起しているのではなく、人びとの身体と身体の間で生起している出来事」だからである（椎野、前掲書、同頁）。
55）椎野、前掲書、38～40頁。
56）Goffman, Erving, *The Presentation of Self in Everyday Life*, New York, 1959, p254.
57）Ibid., p72.
58）Ibid., p254-255.
59）椎野信雄「ドラマトゥルギィから相互行為秩序へ」、安川一編『ゴフマン世界の再構成　共在の技法と秩序』世界思想社、1991年、40～41頁。
60）椎野、前掲書、45～46頁。
61）椎野、前掲書、46頁。
62）椎野、前掲書、同頁。
63）Goffman, Erving, *The Presentation of Self in Everyday Life*, New York, 1959, p10.
64）椎野信雄「ドラマトゥルギィから相互行為秩序へ」、安川一編『ゴフマン世界の再構成　共在の技法と秩序』世界思想社、1991年、60頁。
65）椎野、前掲書、34～64頁。
66）椎野によれば、ゴッフマンの言う「自己」とは、自己呈示というパフォーマンスにおいてのみ、自己表現できる。つまり、呈示というパフォーマンスがなければ自己も問題にならない。ゴッフマンの場合、自己も状況用語であり、状況から無関係な自己（物理的に一人でいる時の人間）は存在するかもしれないが、他者には不可知である（椎野、前掲書、64頁）。
67）Bohnsack, Ralf, *Rekonstruktive Sozialforschung*, Einführung in qualitative Methoden, Leske＋Opladen, 2003, S. 61-64.
68）Bohnsack, Ralf, u. a., *Die dokumentarische Methode und ihre Forschungspraxis*, Grundlagen qualitativer Sozialforschung, Leske＋Opladen 2001, S. 12.
69）Bohnsack, Ralf, 2003, S. 64.

参考文献

Austin, John Langshaw, *How to do Things with Words*, Cambridge/Mass, Harvard University

Press, 1962.
Balázs, Bela, *Der Geist des Films*, Halle/Saale, Wilhelm Knapp, 1930.
Balázs, Bela, *Der Film. Werden und Wesen einer neuen Kunst*, Wien, Globus, 1961
Bohnsack, Ralf, „Qualitative Methoden der Bildinterpretation", *Zeitschrift für Erziehungswissenschaft* 5, Heft 1, 2003.
Bohnsack, Ralf, *Rekonstruktive Sozialforschung. Einführung in qualitative Methoden*, Leske+Budrich, Opladen, 2003.
Bohnsack, Ralf & Marotzki, Winfried & Meuser, Michael, *Hauptbegriffe qualitativer Sozialforschung*, Leske+Budrich, Opladen, 2003.
Bohnsack, Ralf & Nentwig-Gesemann, Iris & Nohl, Arnd-Michael (Hrsg.), *Die dokumentarische Methode und ihre Forschungspraxis*, Leske+Budrich, Opladen, 2001.
Coser, Rosa Laub, „Role Distance, Sociological Ambivalence, and Transitional Status Systems", *American Journal of Sociology* 72, Nr. 2, Sept. 1966, pp173-187.
Fischer-Lichte, Erika & Kolesch, Doris (Hrsg.), „Kulturen des Performativen," *Paragrana*, Band 7, Berlin, Akademie Verlag, 1998.
Goffman, Erving, *Stigma, Notes on the Management of Spoiled Identity*, New York, Prentice-Hall, 1963.
Goffman, Erving, *Interaction Ritual*, New York, Pantheon Books, 1967.
Kellermann, Ingrid, "Becoming a Pupil: Rituals and Ritualisation in Elementary Education," Werler, Tobias & Wulf, Christoph (Hrsg.), *Hidden Dimensions of Education*, Waxmann, Münster, 2006, S. 105-115.
Kellermann, Ingrid, *Vom Kind zum Schulkind: Die rituelle Gestaltung der Schulanfangsphase, Eine ethnographische Studie*, Budrich UniPress, Opladen, Farmington Hills, 2008.
丸木恵祐「日常経験と相互作用論―ゴッフマンのドラマツルギーをめぐって―」、『社会学評論』37（1）, 1986年、24～34頁。
越智康詞「学校の組織社会学：ゴッフマンの分析視覚から」、『東京大学教育学部紀要』28巻、1989年、253～261頁。
大村英昭「儀礼と演技―ゴフマンの社会理論―」、中久郎編『現代社会学の諸理論』、世界思想社、1990年、139～157頁。
大村英昭『非行のリアリティー「普通」の男子の生きづらさ』、世界思想社、2002年。
坂元一光「学校教育研究における儀礼論的接近―若干のレヴューと展望―」、『九州大学大学院教育学研究紀要』第４号（第47集）、2001年、159～172頁。
寒川美穂「E. ゴッフマンの役割理論に関する研究」、『教育学研究紀要』第45巻、中国四国教育学会、1999年、323～327頁。
佐藤毅「初期ゴッフマンとその自己論」、ゴッフマン（佐藤毅・折橋徹彦訳）『出会い』、誠信書房、1985年、119～237頁。
田中理恵『家族崩壊と子どものスティグマ　家族崩壊後の子どもの社会化研究』、九州大学出版会、2004年。
Wagner-Willi, Monika, „Mikrorituale von Grundschülern-Liminalität und Aktionismus," Wulf, Christoph & Zirfas Jörg (Hrsg.), *Zeitschrift für Erziehungswissenschaft, Innovation und Ritual*, VS-Verlag für Sozialwissenschaften, Wiesbaden, 2004, S. 182-193.
Wagner-Willi, Monika, *Kinder-Rituale zwischen Vorder-und Hinterbühne*. VS Verlag für Sozialwissenschaften, Wiesbaden, 2005.
Wulf, Christoph & Althans, Birgit & Audehm, Kathrin & Bausch, Constanze & Göhlich, Michael & Jörissen Benjamin & Mattig, Ruprecht & Tervooren, Aanna & Wagner-Willi, Monika & Zirfas, Jörg, *Bildung im Ritual*, VS Verlag für Sozialwissenschaften, Wiesbaden, 2004.
Wulf, Christoph & Althans, Birgit & Audehm, Kathrin & Bausch, Constanze & Göhlich, Michael & Sting, Stephan & Tervooren, Anna & Wagner-Willi, Monika & Zirfas, Jörg, *Das Soziale als*

Ritual, Leske+Budrich, Opladen, 2001.
Wulf, Christoph & Althans, Birgit & Blaschke, Gerald & Ferrin, Nino & Göhlich, Michael & Jörissen Benjamin & Mattig, Ruprecht & Nentwig-Gesemann, Iris & Schinkel, Sebastian & Tervooren, Anna & Wagner-Willi, Monika & Zirfas, Jörg, *Lernkulturen im Umbruch*, VS Verlag für Sozialwissenschaften, Wiesbaden, 2007.
Wulf, Christoph & Zirfas, Jörg. (Hrsg.), *Paragrana* Bd. 12, „Rituelle Welten," Akademie Verlag, Berlin, 2003.
Wulf, Christoph & Zirfas, Jörg. (Hrsg.), *Die Kultur des Rituals*, Wilhelm Fink Verlag, München, 2004.
山本雄二「学校教育という儀礼―登校拒否現象をてがかりに―」『教育社会学研究』第49集、1991年。